

3月例会は、年度末の残務整理で出られず残念でした。

さて、新年度スタート。滋野小2年目、自情障学級が2クラスになり、知障学級1クラスとともに、特別支援学級3学級体制(あおば1, 2, 3組)でスタートし、2人の新しい先生方(女性のベテラン)をお迎えして、新年度3週間経ちました。昨年度に比べて学級運営がラクになるかと思いきや、2年生のS君が当初から不安定でパニック(かんしゃく起こし)が増え、原級にもなかなか行こうとせず、どうしていいか考えあぐねています。よく言われる「(支援者が)困った子は、(本人が)困っている子」ととらえたいところですが、なかなか余裕がありません。

もう一人新たに担当している5年生のK君は、不登校傾向で、母か祖母に連れられて教室に入るものの、「家へ帰る～」と抵抗するので10分以上身体拘束して収めるということもあります。その後1時間程度はソファにくるまって寝ています。学習に向かおうとする(集中できる)時間が2人とも短く、ほかにも児童4人が、国語や算数の時間に入れ替わり、あおば学級に通ってきます(在籍児童、サービス児童)。一人ひとりに合わせた教材準備もせねばなりません、そううまくいかないのも現実であります。

また、特別支援教育コーディネーターの仕事もあり、日々朝から晩まで何かとバタバタしています。

さて、今回もまたまた、資料の紹介ばかりのレポートで、すみません。

(1) あの人はいま……伊藤尚志さんの木曾養護学校での様子

渡邊先生からのメールに、「ぶんしっし」講座では、「コパン」(福島県)に大量発注せねばならない云々といった文言があり、そういえばコパンという作業所を発掘したのは、当時稲荷山養護学校から国立特別支援教育総合研究所に内地留学していた伊藤尚志さんだよねあとと思ひ、ネットでなんとなく検索(伊藤尚志 養護学校)したら、ヒットした資料です。「UMA LIFE」という雑誌(メトロポリタンプレスという出版社があるとは知らなかった)に昨年掲載されたようです。伊藤さんがタブレットを持ちながら映像を撮ったり記録したり、子どもと同じ動作をしてサポートしたりしている様子が写真に映っています。木曾養護学校は、地元の木曾馬を題材にしたホースセラピーに以前から取り組んでいることは聞いていましたが、伊藤尚志さんが、木曾養護学校で活躍していることが分かってよかったです。稲荷山養護の頃やっていた理科実験ルーム「ゼブラ」は今もやっているのかなあ。本人に連絡して了承を得ていませんが、今回、サークル資料として(ネットにもあるので)紹介しました。

(2) 淀井泉さんのガリ本(仮説社オンラインショップから購入した実物。内容については今後また。)

まず、『たのしい授業』2023年4月号は、「読み」から始まるたのしい国語の特集です。今やっている国語の読み書きの個別学習とも直結していて、興味深い記事が多かったです。

淀井泉さんの「囲み式ねわざ音読法」は、文節に区切ることは私もよくやるのですが、ねわざ(～ね、～ね、で区切る)という命名がさすが、と思いましたがね。館光一さんの「漢字ドリルを『読み』に活用」というのも、漢字の読みを重視するという意味でも、なるほどでした。空書きは私もよくやるのですが、右手・左手・両手・お尻を使って空書きするというのはニューバリエーションで、早速2年生のSくんとやってみて、お尻を使って、というのが全身運動として体を使って書き順を覚えるという感じで、おもしろいというだけでなくまさに体得できそうな感じです。そこで紹介されていた『淀井泉の読み書き授業』を仮説社で手に入れました。

『たのしい授業』ではさらに、小野健司さんの「教育の常識と〈教師の研究の自由〉(上)」論文が掲載されていて、さすが研究者です。石井勲の〈読み先習〉漢字教育の実験についても詳しく論じています。当時成城小学校長の、澤柳政太郎による〈読み書き雁行(読み先習)の法則〉も出てきます。

板倉聖宣アーカイブズ65「読むことの教育の復権を」も、以前何度か読んでいても忘れていた内容がそれなりに多く、日頃の実践に生かしていないなああと振り返させられます。山本正次先生の実践も研究したい!

そして子どもたちにどうしても「書ける」ことまで要求していたのを、まず読めればよい、というふうに変え直せた、いい資料が満載でした。そういえば昨年度6年で一年間だけ受け持ったNくんは、(引継ぎの際)

「とにかく教科書を読むだけでいいから」と言われて、読むことを主に進めてきて、終盤は自分からだんだん書こうとするようになってきたもんなあ。もっと詳しく研究したいことがいっぱいだあ!『たのしい授業』の記事をサークルでもっと読み合わせてもおもしろそうです。もちろん板倉先生の著書の読み合わせがこのところ続いてきているのもいいことですね。

【以上】



長野県木曾養護学校「馬の学習」の風景。

「馬の学習」が拓く 子どもたちと馬の未来

長野県木曾養護学校

子どもが馬と関わることは、教育的にとっても有意義だと言う意見が多く聞かれる昨今、そうした施設も全国に増えつつある。なかでも早い時期から馬が介在する教育の取り組みを続ける、長野県木曾養護学校の「馬の学習」の現場を訪ねた。

文・写真＝大岩友理

木曾馬の力を借りた 学習の始まり

1996(平成8)年、「子どもは、できる限りその子が生活する地域で育てたい」という地域住民の強い要望により、「長野県木曾養護学校」(以下＝木曾養護学校)が設立された。日本全国にある特別支援学校のなかでも、「馬」を用いた授業を教育に取り入れている興味深い学校である。

木曾養護学校に「馬の学習」が導入された経緯と現状、今後のあり方について、木曾養護学校教諭・伊藤尚志さん、木

曾馬の里 乗馬センター場長・中川 剛さん、日本治療的乗馬協会理事長を務める滝坂信一さん、それぞれにお話を伺うことができた。

古より活用されてきた「木曾馬」は、時代の変遷とともに活躍の場を失っていった。地域文化資源である木曾馬の保存を目的とし、木曾町に「木曾馬の里 乗馬センター」がつくられたのは1995(平成7)年。木曾養護学校が開校したのは、それからほどない翌年4月である。

木曾養護学校では設立時から木曾馬を用いた授業が検討され、当時、国立

特殊教育総合研究所(以下＝特総研)の研究官だった滝坂さんの意見なども参考にしながら、「治療的乗馬^{※1}」を基にした学習の可能性を模索していた。

「木曾馬の里 乗馬センター」に中川さんが勤務し始めたのも同じ時期。中川さんは、特総研が1991年当時取り組んでいた

※1 治療的乗馬：障がいのある人々に対し、馬を用いることで心身の治療あるいは健康維持に寄与することを目的とした活動全般を言う。ドイツ語圏を中心に医療、教育の分野で普及した。似た活動の「障害者乗馬」は、イギリスが発祥で、障がいのある人々の生活の向上、社会参加などの公益性を重視し、馬事文化として発展してきた。



馬房掃除風景。教員は、子ども自身の主体的な行動を促す。



「治療的乗馬」実践研究のグループに加わり、この領域の研究開発に携わってきた。

「馬の学習」は当初、不定期の校外学習として始まったが、1999(平成11)年から3年間、特総研の〈障がいをもつ子どもへの馬の特性を利用した指導に関する研究〉への協力校となったのをきっかけに、高等部の「総合的な学習の時間」「作業実習」へと位置づけられた。その後、授業として定期的に「木曾馬の里 乗馬センター」を訪れ、乗馬、厩務作業、馬とのふれ合いなどを行う現在のスタイルへと発展していった。

こうして、木曾養護学校の設立とともに地域の文化資産である木曾馬を用いた「馬の学習」は、「治療的乗馬」研究と大きく関わりながら、今日の学習形態へと発展してきたのだ。

「馬の学習」を実践する指導者にとって大切なこと

特別支援学校では、児童生徒は教科などのほかに、自立活動^{※2}を学ぶのが特徴だ。「馬の学習」は、主にこの自立活動の内容について木曾馬を通して学んでいく。

木曾養護学校の教諭・伊藤さんによると、毎春、保護者へ「馬の学習」の概要説明会を開催し、希望児童生徒を対象に「馬の学習」を実施する。馬を扱うことに伴う安全への配慮などから、定員は全校児童生徒のうち午前の部8名・午後の部6名で学習する。

※2 自立活動：ここでは、社会で生きていくために必要な要素となる6区分①健康の保持、②心理的な安定、③人間関係の形成、④環境の把握、⑤身体の動き、⑥コミュニケーションを指す。

募集は毎年行われるが、なかには小学部から高等部の12年間を継続参加する児童生徒もいるという。

学校から「木曾馬の里 乗馬センター」までは、スクールバスで片道30分。到着後授業開始となり、1時間のなかで乗馬・厩務作業・ブラッシング・餌やりを個人に応じて学習する。乗馬は一人あたり15分(児童生徒の状態により順番や実施の可否が決める)。

児童生徒一人に対して教員一人がサポートするのが基本だ。

馬と一緒にいたい・活動したい・乗りたいという子どもがもつ意欲。そして「自分がやった」という主体的達成感。やりたい・もっとやりたい・またやりたいという次へつながる意欲。これは教育心理学のなかに出てくる考え方、「自己決定理論^{※3}」に通じる。

米国の心理学者ダニエル・ギルバートは、著書『幸せはいつもちょっと先にある 期待と妄想の心理学』(早川書房)のなかで、人はコントロールすること自体が心地よく、それは生まれつきもった基本的欲求の一つであると言い、「自己決定理論」について述べている。

「馬の学習」の指導者にとって大切な要素は、「最低限で最大限の援助」だと滝坂さんは言う。そうした「馬の学習」指導

※3 自己決定理論：アメリカの心理学者エドワード・デシとリチャード・ライアンが提唱した、人を“やる気”へとつなげる理論。自分で決めたいという「自律性」、自分はやれると感じる「有能感」、周囲と良好でありたいという「関係性」の3つの欲求が重要とされる。



教員は担当の子どもの行動記録をとり、ふり返りをする。



教員により「馬の学習」の動画記録もされ、今後の学習に生かされる。



ロングレーンをつかって馬を制御することで、乗っている子どもにとって、より眼前が開ける。



乗馬と引き馬の学習。馬を扱う場面では、木曾馬の里スタッフも各子どもに付き添う。



引き馬の学習。

者についての考え方が形成された経緯を、滝坂さんは次のように教えてくれた。

「これは、私の考える教育や長年のテーマが『馬の学習』を通じ、たどり着いた考え方です。1999年からドイツの研究者との間で行われた日独共同プロジェクトの機会に、馬を介在とした障がいのある子どもの教育やリハビリテーションについて、さまざまな見聞をしました。その結果、馬が介在する時、人が人に対してできる事柄を大きく超えるということに気付かされました」

特別支援学校の教員は通常の学習指導のほかに、自立活動の指導が加わり、

一般的な小中学校・高校の教諭と比較すると指導内容が多く、教員の資質が大切な要素となる。

これについて滝坂さんはこう話す。「欧米には、馬を介在させた活動を行う指導者のための研修・養成コースのある国があります。障がい、教育、馬事についての専門家から構成する組織もあり、子ども時代から馬を身近に慣れ親しんだ人が教育や医療で仕事をするということが少なくないのです。日本でも研修・養成コースを修了した教員が指導するのが理想ですが、現状では、人の専門家と馬の専門家がチームをつくって、実践を共有

し自分たちのスタイルを創っていくこと、実践者同士が高め合う機会を工夫していくことが大切です」

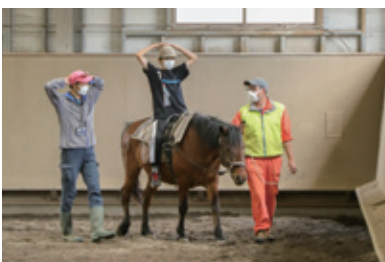
この考えを踏まえ、木曾養護学校「馬の学習」では、Zoom会議での教員と牧場スタッフとの情報交換や学習担当教員の牧場研修をしているという。

学習の現場となる「木曾馬の里 乗馬センター」の中川さんは次のような工夫をしていると教えてくれた。

「ここ10年程は毎年、学習参加の児童生徒の授業参観をしています。学校内での児童生徒の日常を観察することで、学校側が考える目標の実現に向けてどのよ



子どもの目標により、木曾馬の里スタッフによる乗馬の指導も行われる。



木曾養護学校の教員は常にサイドウォーカーとなり、子どものサポートをする。



「乗馬の学習」では、ほとんどの子どもが自然と笑顔になる。



餌やりをする中学部生徒。



長野県木曾養護学校の生徒が作業学習の一環として製作した、地域連携コラボレーション商品。木曾馬がモチーフの絵皿（鹿毛と河原毛の2種類）。木曾馬の里乗馬センター売店「とーねんこ」にて販売。



木曾馬の血統について調査をしている生徒に対応する木曾馬の里スタッフ。



ブラッシングする中学部生徒(右)と、教員(左)。

うなアプローチが可能か、当センタースタップも検討しています」

これからの馬の領域と未来を担う子どもたち

木曾養護学校が「馬の学習」を開始して、今年で23年。発足当時から、馬を取り巻く環境や子どもたちが暮らす環境も変化した。改めて「馬」を使った学習の質的な向上について木曾養護学校では

今、再検討されている。

特別支援学校での自立活動で「馬」にしかできないことの見極めと学習のふり返りを通し、児童生徒の目標達成に最適なアプローチを探るのが、今の課題なのだ。

動物介在療法では、昨今さまざまな動物が使われている。そのなかでも「馬」に着目し、治療的乗馬の研究をしてきた理由について、滝坂さんは、「馬のもつ特質や人への親和性が人の心に訴えるところ

が、大きな要因でした」と話す。

特質とは、捕食される側である彼らが、種を保存するために集団行動で危険回避をしてきたことで獲得した高い感受性のこと。それは、馬がさまざまな神話や民話に登場することにもつながっている。

そうしたことから、動物介在療法のうちでも馬は、人の自立性を養い、モチベーションを高める特異な存在と言える。

今後、馬が生きていく場所と馬の利活用とをバランスよく保つことが、大切なだろう。生態系のバランスのように、セラピーホースが多ければよいということでもない。馬にしかできないことを見極め、馬たちのよりよい利活用を考える責任は、今を生きる私たちにある。



「馬の学習」後、その場で指導方法の確認がされる。左より滝坂信一さん、伊藤尚志さん、中川 剛さん。

Information

長野県木曾養護学校
〒397-0001
長野県木曾郡木曾町福島1134-1

木曾馬の里 木曾馬乗馬センター
〒397-0301
長野県木曾郡木曾町開田高原末川5596-1